

梅雨の晴れ間	17
タラヨウ	18
風切地蔵	19
アメンボ	20
地震(なぬ)	21
アリジゴク	22
日がさ	23
ひまわり	24
夕立	25
花火	26
まつゆば	27
日食	28
セミ取り	29
入道雲	31
カフトムシ	32
ホタル	33

ホオズキ人形	34
セミとザザ虫	35
ヒガンバナ	36
猫じゃらし	37
お月見	38
人さらい	39
こつこのトサカ	40
アマガエル	41
タンポポ	42
節分	43

代稽古	3
笹舟	4
一刀流	5
桜ふぶき	6
道場破り	7
カラスノエンドウ	8
桜餅	9
師の教え	10
えのみ鉄砲	11
しゃぼん玉	12
松ヤニ	14
ペンペン草	15
アジサイ	16

信州児童文学会誌「とうげの旗」26号所収

小十郎と千代 (1)

松永ひろし

2020.10

〈目次〉

代稽古

十九歳の剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場のはねつるべ井戸の端で体の汗を拭いていると、横木戸から千代が入って来た。千代は又右衛門の孫娘で五つ。気ままでわがまま。小十郎が又右衛門を師と敬うを幸いに、平気で小十郎に無理難題をいう。

「じゅっしゅっしゅっは、いかんじゅっくちしてやる」

代稽古の道場がもう一つにやります。また、我が家の道場には町人が二人、通い来ます。一人は魚屋、もう一人は八百屋。ですので、それぞれ魚と野菜が小十郎への謝儀です。」

「ちよのちちつえのようじに、しかんせぬか」

「堅苦しいこととは性に合いません。それに桜木の家は兄の長一郎が継いでおります。小十郎は、好きなことができる次男坊です」

「すきなじゅっしゅっ、なごじゅ」

「剣の修行です。さきればもう一度、旅をして腕を

磨きたい思いはあるのですが……」

「しゅぎょうたびを、したことがあるのか」

「はい、十五の時、東海道を京にのぼり、諸所で手あごぎを受けました」

「なんねん、たびした？」

「およそ三年」

「よく、せにが、つづいたのう」

「訪ねた道場では三月ほど住み込みで下働きと稽古をさせていただき、去る折には知りあいの道場へ添え状を書いていただきました」

「もとつて、いえは、どうした」

「町道場を開いていた安土玄之丞さまが、高齢で閉められたものを譲り受けました。玄之丞さまは、兄と私の剣の師でござります」

「げんじいは、ちよのじいと、なかよしだぞ」

「はい、玄之丞さまのお口利きで、又右衛門道場の代稽古にまいることができました」

「そうじゅ。もんでいた、けいこをつけたあと、ちよの、あいてをするやぐそくでな」

「そのような約束はいたしてござりませぬ」

語気強く応えながら小十郎はあらためて千代の顔を見た。どうやって小十郎を困らせようかと、考えを楽しんでいる顔であった。

笹舟

十九歳の剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場の代稽古を終え、井戸横で体の汗を拭いていると、目の前の水路を笹舟が水底の小石にぶつかりながら流れていった。

(笹舟とは懐しい。だれが流したのだらう)

すると、横木戸があいて千代が顔を出した。千代は又右衛門の孫娘で五つ。気ままでわがまま。小十郎が又右衛門を師と敬うを幸いに、時に平気で小十郎に無理難題をいう。

「じゅっしゅっしゅっは、いかんじゅっくちしてやる」

「まいりました。どなたが作られたのかと思案したじゅっしゅっ」

「ははっしゅっしゅっは、ななびななをしくれるか」

「姉上といくどかつくりました。つくるに、やすきゆえ、いまだ覚えております」

「ちよも、ははっしゅっからおそわったからでござんぞ。ごちらのふねがはいか、きそおじ」

そついつや千代は横木戸へ駆けていった。お屋敷の庭の東端に矢竹の小さな藪があり、道場の庭の西端にも同じように矢竹がある。

小十郎は太めの葉を一枚取ると、先から一寸五分ほどのところ、内側に折った。つぎに折り目から一寸ほどを二筋裂いた。端の二つをつまみ、片方をもう片方の端の中に挟み込む。同じように反対側も折り込んだ。

千代が笹舟を持って戻ってきた。小十郎は、千代の笹舟を見た。五歳の子に挟み込みは難しいはずが、すつきりきれいな仕上である。

(はは、お、母上、たのんだな)と思った。

「じゅっしゅっしゅっ、ちよがさきにながすから、五つかぞえてから、ながせ」

「お千代さま、一緒に流すのが、競い事かと」
 「ちよはさいさいから、さきにながすのだ」
 そので小十郎が、
 「舟の大きさは違いなきよつ、見えまする」
 といつと、千代は
 「なら」「じゅんじゅんさ、さいをくなわ」
 またしても、無茶をいふ千代であった。

一刀流

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場の井戸端で体の汗を拭いていると、横木戸から千代が入つて来た。千代は又右衛門の孫娘で五つ。道場の縁側に腰をかけた、声をかけた。
 「「じゅんじゅんは、けんづつてがつよいか」
 「安土玄之丞さまから、真一刀流免許皆伝を頂戴しました」
 「なら、つよいな」
 「玄之丞さまに」教授いただいた剣は、一にも二に

も、わが身を守る剣で、強くなるための剣ではない、
 さいませんでした」

「あいてを、うちまかさぬのか」

「はい、稽古は受けに重きをおきました。打ち込む相手がいやになるほど」

「それも、むずかしいことじゃな」

「気が抜けませぬ。受けを誤れば傷を負います。」

怪我をせぬため、よく稽古しました」

「「こでは、ごんな、けいこをつけておる」

「又右衛門さまの剣は、玄之丞さまとは真逆の、攻めの剣です。木刀ではげしく打ちあいます。代稽古の小十郎は、又右衛門さまの流儀で、厳しく稽古をつけております」

「「けそ」ねた、あいてが、けがせぬか」

「相手の手や胸を打つてしまうことがありますが、それは受けそ」ねた相手が未熟ゆえ。手加減は上達の妨げとなります」

「ちよが、あいてでも、てかげんせぬか」

「はい。ごなたが相手でも稽古で手加減はいたしません。ただし、お千代さまとの稽古は、お千代さま

が自在に木刀を振れるよつ、」なられてからです」
 「ちよは、あのおもいばくたつのは、」がてい「や」
 「「お千代さまを怪我なせずには、みまず」

千代が、小十郎を見て、

「ちよも、よかった。「じゅんじゅんを、けがさせず

に、むす

とこつて、ニヤリと笑った。

桜ぶぶき

齋藤又右衛門屋敷の玄関付近と、道場の入口付近には桜の樹が幾本がある。花の盛りが過ぎ、風が吹くつものなら枝から飛ばされた花びらが、空いっぱい舞い上がる。

代稽古を終えた桜木小十郎がはなつるへ井戸の横で、体の汗を拭いていると、又右衛門の孫娘の千代が横木戸を開けて顔を出した。

「「じゅんじゅん、あのおむねがみだこ」

あの技とは、道場の庭で又右衛門と門弟が桜の花見をした折、小十郎が楊枝で、舞う花びらを瞬時に三つ、刺したことをいふ。

「お千代さま、お待ちくだされ」

と応えて小十郎は、桜が舞う庭の西隅で矢竹の葉を一枚下へ引き抜いた。小太刀の刃で葉鞘を切り離し、その先を鋭く尖らせた。

それから舞い落ちる桜の花びらを見据えると、葉鞘をつかんだ右手を空に飛ばし、たちまち三つ、花びらを刺した。

「すーい。「じゅんじゅん、みじゅん」

と千代がほめた。気をよくした小十郎が、

「お千代さま、勝負いたしませぬか。私が花びらを五つ刺す間に、お千代さまは舞う花びらを一つ取れたら勝ちといふこと」

「いや、だめじゃ。むすのは、十じゃ」

早くも千代は難題を課した。

「では、お千代さま。『用意、始め』の号令を」と小十郎がいうと、千代は自分に向かってくる花びらを目で追いつながり、

「よいはじめ」といった。

跳び上がり、走って跳び、花びらを両手でつかまえようとすする千代。小十郎は地面につけた足を動かさず、右手につまんだ葉鞘で舞いくる花びらを次々に刺した。

「……やつ、」のつ、とお。お千代さま、わたしの勝ちですね」

千代が振り向いた。そして、いった。

「じゅんじゅん、二十じゃ。二十じゃ。じきはちよがーじゅんまえに二十じゃ。よいい、はじめー」

(やれやれ、勝負など、するのではなかった) ちよっぴり後悔した小十郎であった。

道場破り

桜木小十郎は齋藤又右衛門道場で、道場破りの剣客と木刀で立ち合っていた。若者は神道無念流の大木竜之進と名のつた。

「師範は、いま道場におられる」

応対に出た門弟がそう応えると、

「では、いま、稽古をつけておられるお方に、」指南を所望したい」

と大木竜之進がいった。

「ただ今の稽古は、真一刀流の桜木小十郎どので、当道場流派の方では」やらぬ」

「かまわぬ、桜木どのに所望したい。お聞き届けくださるようお取次ねがいたい。拙者が勝てば表の看板をいただくとお約束で」

小十郎は所望を受けた。

大木竜之進は大柄な体躯の髷面で、小十郎より三つ四つ年上に見えた。腰の大小を門弟に預けて、壁の刀掛けの木刀を掴むと、

「ユッー」

と一振り。その激しい風音に門弟が騒めいた。

小十郎は木刀を正眼に構え、先を相手の眼間に向けた。大木は正眼に構えてから、上段に振りかぶっ

た。若き小十郎を、一撃で木刀ごと粉碎できると思ったのだらうか。

「ヤッ！」

大木が踏み込み鋭く打ち込んだ。小十郎は受けず、正眼のまま横に動いてかわした。

「ガシッ！」

大木の木刀が床を打ち、小十郎目がけて横に払われた。小十郎は、スツと後に身を引いてよけた。大木は中段に構えると、

「イッ！」

と木刀を突き出した。小十郎はサツと左に動いてかわすと、ドン！と大木に体当たりして道場の床に転がすや、木刀を振り下ろし、大木の目の前で寸止めた。

「まいったーあ」

目を剥いて、大木が叫んだ。

カラスノエンドウ

十九歳の剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場の代稽古を終え、はねつるべの井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままにわがまま。小十郎が又右衛門を師と敬うを幸いに、平気で小十郎に無理難題をいう。千代がいった。

「「じゅんじゅん」のはなを、しってあるか」

目の前に出された小さな花は紅色で、葉は魚の骨のように並び、先に巻き髪がある。

「カラスノエンドウですね」

小十郎は即座に応えた。

「カラスノエンドウか。ン、カラスはくろいぞ。」

「このはなは、あかい。なぜカラスぞ」

「花の後、細長い実がつきます。その実の鞘は初め緑色で、熟すと黒くなります。それゆえカラスの名がついたのでありましょ」

「じゅんじゅんはものしりじゃな」
 「童のころ、姉上と草花で遊びましたゆえ。カラスノエンドウの実は、笛になります。鞘の中の豆が太ったころ、作り方とふき方を、お千代さまにお教えいたしましたよ」

後日、小十郎が千代にカラスノエンドウの実で作る「ピー」笛を教えると、千代は口に含み、さんざん吹いた末に、音を出した。

さらに後日、真っ黒に熟した実がそこそこにある畑の畔で、小十郎は千代にいった。

「黒い実を、そっとおにきりください」

千代のちいさな指が鞘にふれた瞬間、チツと音がして、鞘が二つに割れてぬじれた。

「じゅんじゅん たねが ないぞ」

「弾け飛んだのです。カラスノエンドウはそのようにして子孫を殖やすのです」

「おもしい」と、千代は黒い実を次々に握って種を飛ばした。弾け飛ぶ種が、やわらかな手に当たる刺激が心地よいようだった。

小十郎は、ツリフネソウの実も、カタバミの実も、

鞘をはじめて種を飛ばすことを知っている。が、千代が難題をいわない今は、あえて黙っていようと決めたのであった。

桜餅

十九歳の剣士、桜木小十郎が齋藤又右衛門道場の代稽古を終え、はねつるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が飛び出てきた。次いで、大きな黒い犬が飛び出た。千代は、

「じゅんじゅん このいぬが、ちよを、おいまわす。やめさせとくれ」

といって小十郎の背に隠れた。

小十郎は犬を見た。体軀は二尺あまり、耳が立ち、尾がくるっと巻いている。秋田犬系の成犬にちがいない。秋田犬とその仲間は、主人に従順でおとなしいそうだが、他人にもそうかは分からない。そこで小十郎は油断なく身構えて、犬を注視し、気がつい

た。

（犬が尾を振っている。目に怒気はない。甘えたいのか？ それとも……）

小十郎は背後の千代から、なにやら匂いがする「ここにも匂いした。そこで、

「お千代さま、なんぞ、お持ちでしょうか」と訊いた。

「もってば おらた」

と千代はいった。あやしんだ小十郎が振り向くと千代が、手を背後に隠した。

「この匂いは、桜餅ですね。犬は桜餅の匂いに引かれてついてきたのでしょ。尾をぶって、頂戴といつています」

「いやじゃ。これは、ちよのものじゃ」

「弱りましたな。犬が帰りませぬ」

「じゅんじゅん そとにつれだせ」

「連れ出せといわれましても、小十郎はこのような大型の犬は扱いかねます。そつだ、お千代さま、桜餅をお食べになつてしまい、葉だけ、犬にあげてはじゅんじゅん」

と小十郎がいうと、千代は大きく口をあけて、餅をくわえ、葉を小十郎に手渡した。

「ほれっ、犬や」

と小十郎は桜餅の葉を犬の鼻の前に差した。犬は匂いをかいで、首を傾げ、千代をちらちら見ながら横木戸から出ていった。

餅をほおばった千代が、手をたたいた。

師の教え

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場の井戸端で体の汗を拭いていると、横木戸から千代が入って来た。千代は又右衛門の孫娘で五つ。道場の縁側に腰をかけた、小十郎に声かけた。

「いせん しゅぎょうのたびをしたといったが、たびをおえて つよくなったか」

「さあ、どうでしょう。ただ、いかような場にも、応ずる心がけができました」

「かたなをぬいて、きりあつとぎにもか」

「真剣で斬りあつた」とは滅多にありません。御前試合にても木刀が流行です。昔一度、町中で、若い娘にからむ浪人をたしなめた時、刀を抜かれ、斬りかかられた「とがあります。」

「じゅうじゅうせ かたなをぬいて きりおつたか」「いえ、きりあいたなれば居合わせた衆にけがをさせましてつかもせれません。それで、娘がその場からいなくなったことを確かめて、下駄を脱ぎ、裸足で逃げました」

「うちはのか」

「はい。斬りあつて、何の得もありません」

「じゅうじゅうせは、やむじだったか」

「はい、やむじです」

「よし、ちやがつかひくしてやる。まず、やしきのまわりを、十かい、はこた」

「じゅうじゅうせ、わが師匠土文之丞さまの教えは、剣は無益に斬るものでなく、磨くものでした。ゆえに益なきその場は逃げました」

「みがくものじゃあ、」

「まず、刀を磨くとはいけません。研ぐです。ゆえに、

に小十郎は、磨くは心と考えました。剣術が強いだけでは駄目だというお論じだ」と

「ちよは、つかねば、よいと、おもつがな」

「弱より強いにこしたことはありませんが、合わせて人の道も究めよとの教えか」と

「にげることは、ひとつのみさか」

「争いを避ける道です。相手は、おのれを恐れて逃げたと思ひ、悪い気はせぬでしよう」

「やむじの、じゅうじゅうせ、いいわけじゃな」

と云つて、千代がフフッと笑つた。

えのみ鉄砲

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終

え、井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から千代が顔を出した。千代は又右衛門の孫娘で五つ。気ままでわがまま。

「じいせ、はははひえせ、くやにあらぬ、じゅうじゅうせ、おもしろいあそびはないか」

と云われて小十郎は思案した。すると、西陣の矢竹の数が目にとまった。

「お千代さま、道場のお爺さまに竹を頂くとお伝えください。わたしは探し物に出ます」

四半時ほどして竹筒をもって戻つた小十郎は、筒の中身を井戸水が残る木桶にあけた。青いちいさな玉が水にこぼれ落ちた。

「じゅうじゅうせ、このまるいものはなにが」

「榎の実(えのみ)です。えのみ鉄砲の玉(えのみ)です」

小十郎は矢竹へ歩き、小太刀でその一本を中程の節の下から切りとつた。

その竹を、節から三寸ほどの長さまで切り、さらに節の上、一寸ほどで切り離した。

矢竹の先の細いところを三寸ほど切り取り、裂いた矢竹の葉をまいて一寸の竹筒の穴にぎつく押し込んだ。それを二寸の竹筒に差し込み、出た部分を切り落とし、次は引き抜いて、その先端を二分ほど切り詰めた。

一寸の竹筒に榎の実を押しつぶしきみに一つ詰め、一寸の竹筒の細い先で筒の先に送る。次いで別

の榎の実一つを詰め、一寸の竹筒の先でゆっくり押し込んでから、一気に押した。

バン……

破裂音とともに榎の実が飛び出た。

真剣に小十郎の手元を見ていた千代が、音にびっくりしてひっくり返つた。そして、

「じゅうじゅうせ、ちよま、やりたい」

とせがんだ。が、五歳の子が竹筒に玉を「めるのは、容易でない。押すにも力が必要」

「お千代さま、玉込めは小十郎がいたしますが、約束です。人に向けてはなりません」

「わかった。じゅうじゅうせ、はちうせ、ちよ」

玉を込めて渡すと、やはり、筒先を小十郎にむけた千代であった。

しゃぼん玉

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終

え、つるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木

戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままでわがまま。

千代を見て小十郎は、また、面倒なことをいわれそつたと覚悟した。すると千代は後ろに隠していた手を小十郎の前に差し出した。

四寸ほどの葦の茎と、茶色の徳利だった。

「ん、しゃぼんですか」と小十郎が訊くと、千代は、「そつ」といって、葦の茎先を徳利の中にいれて引き出すと、反対側に口をつけて、ふうつと吹いた。小さなしゃぼん玉が勢いよく、たくさん噴き出て風に乗った。

今度はゆっくり息を吹き込むと、茎先にできたしゃぼん玉は、ふるえながらおおおきくなり、はじけて消えた。

「おおきいのはむずかしいな。」「じゅつじゅつはおおきいしゃぼんだまを つくれるか」

「姉上は上手でしたが、わたくしは下手で…」

「ちってみな」と千代は幸と徳利を手わたしたが、小十郎はつまく膨らませむななかつた。

「ち、ち、ち、わたくしは無理だ！」

松ヤニ

信州・深山藩の松本家に嫁いだ姉の乙女が実家に来た時、桜木小十郎は姉に、千代としゃぼん玉をしたことを話した。すると

「松ヤニの枝を桶に浮かべなかったのかい」と乙女がいった。なので、小十郎は訊いた。

「浮かべると、どうなるのですか」

「教えないけど、教えない」

お千代さまみだ、と小十郎は思った。

齋藤又右衛門道場での代稽古を終えた小十郎が、しるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままでわがまま。

「じゅつじゅつ おおきいしゃぼんか」と訊かれ、「は、は」と応えた小十郎は、姉の言葉を思い出した。そつ、

「じゅつじゅつま」「がてはあるのじゃな」

「はあ」といってから小十郎は、姉が母親から、松ヤニを加えると割れにくいしゃぼん玉になると教えられていたような気がした。

「お千代さま、しばしお待ちを」と見越しの老松に向かうと、目の高さにヤニがべとりとあった。落ちていた小枝でこすりとり、徳利の中にいれてかき混ぜた。

「お千代さま、お試しくたされ」

千代がゆっくり息を送ると、しゃぼん玉は千代の拳くらの大きさになって、葦の茎をふわっと離れた。千代が、わあっと喜んだ。

「ふう、気ままでわがままでも、お千代さまはまだ五つ。むじゃきな童だ」

と小十郎が思った時、

「じゅつじゅつ わわてきえるまえに、つかまえよ」無理難題を忘れぬ千代だった。

「姉上から聞いたじゅつじゅつだ…」

といて、二寸ほどの小枝を拾って、それで老松のヤニをそぎ取った。そつ、

「わたしも、どうなるか知らないうです」

といて、小枝をたらいの水につかべた。

「えっ…」「おおっ…」

千代と小十郎が同時に驚いた。小枝が、音もなく前にすすんだのだ。松ヤニから脂のような膜が広がっていく。小枝が止まったとき、千代がねだった。

「じゅつじゅつ、もいぢや、やっつみせよ」

小十郎は小枝をつまみあげて、再度たらいの水に置いた。小枝は前に動いたが、先ほどのようにたらいの端までは届かない。また、つまみあげて置くが、動きはにぶく、終には置いても動かなくなった。

「どうしてじゃ」と千代がきいた。

小十郎はたらいの水面をおおう脂の膜が気になった。試したらいの水を替え、小枝を置くと、枝は「一気に前へ動いた。」

千代が目を輝かせた。小枝をつまむと、「じゅつじゅつ、たらいのみずを、かえよ」

千代が飽きるまで水を替え続けた小十郎は、ちょっぴり姉をうらんだのであった。

ペンペン草

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままでわがまま。小十郎が又右衛門を師と敬つを幸い、平気で小十郎に無理難題をいう。

「じいばいさいしているぞ。あれはなんじゃ。みてまいり、ちよにおしえよ」と千代がいった。

「承知いたしました」と応えて小十郎は、西隣りの空地に出向き、草を一本摘んで戻ってくる。千代にいった。

「お千代さま、これはナスナという草です。別の名

前はペンペン草といいます」

「ペンペン草じゃとっ」

と千代が尋ねると、小十郎は持ってきた草の一本を千代に手渡し、

「こつぺんまわりの白いものはナスナの花で、下の方にある三角形は実です。実のこの形は三味線を弾く道具のバチの形に似ています。三味線とはペンペンという音を出す楽器ゆえ、ペンペン草と言われるようになったそうです」

「ふん、それでペンペン草か」

「お千代さま、手のひらの上で、実の一本を真ん中からお割りください。出た小さな粒はナスナの種です。」

次は実をつまんで下に引きまじょう。引かれて茎の皮が剥がれたら、切れぬ前に手を放します」

「じいばいさい、じわじわいか」

「お上手です。同じように十ほど引きまじょう。そうしたら耳元で、茎を指で回してみてください」

千代は実を引き暮らし、耳元でナスナの茎を回した。そして目を大きく見開いた。が、すぐに不機嫌

な顔になった。

「じいばいさい、シヤカシヤカシヤカじゃ。ペンペンではなこれ」

アシサイ

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、つるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代がやってきた。千代は五つ。気ままでわがまま。

「じいばいさい、じいばいさいのはなはるいいるだが、やしきのにわのアシサイはあかいぞ。なばい」

と千代が訊いた。目の前にはたしかに琉璃の花を咲けたアシサイがある。

「お千代さま、小十郎には分かりかねます」

「おじいばいさい、じいばいさいのいろがちがひつはふじいばい」

「サクラでもモモでも、おなじのいろはなほおなじ

であったり、紫があつたり。姉上はアシサイを七変化とも呼んでいた気がします」

「うちへんげとは、じいばいさいのことか」

「言葉のままならば、花の色が七つに変化するということとじいばいさいが……」

「ほんとうに、ななつのいろにかわるのか」

「じいばいさい。正確に七つとじいばいさいはななついろいろな色の花があるというたとえではなないでじいばい」

「なら、はなのいろを、かぞえてみて」

と千代はアシサイを指さした。

「琉璃でじいばい、淡い琉璃、淡い紫色に紫色、白っぽい朱色に、朱色ですわ」

「六つだな。あと一本はじいばい」

「いま、お千代さまは、お屋敷の庭のアシサイは赤だともつをくれましたな」

「それで七つか。んっ、あつたのは、じいばいもあつたぞ。はちへんげになったわ」

「やはり、花色の数ではないようすわね」

「サクラでもモモでも、おなじのいろはなほおなじ

「そのよの」 「ふじぎな はなごやな」

「小さな花がたくさん丸く集まって、株も大きく
うっげな姿だすね」

「このはなが」「みちのりゅうがわ」「すうりつとじ
ういていたら きれいいじゃな」

小十郎は耳をつたがった。まさか、お千代さまか
らそのよつな言葉があるうつとは……。

梅雨の晴れ間

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終

え、井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から
又右衛門の孫娘の千代がやってきた。千代は五つ。
気ままにわがまま。

「このせうのうい はれた」「のてまきは じゆのは
れまごやな」

と千代がいったので、小十郎は

「お千代さま、じゆなから聞かれたのですか
と訊ねた。

「たねじゃ。たぐさとの せんたくものを あらう
て ほじておる」

たねは齋藤家に住み込みのお手伝いで、北の大畑
村の百姓の娘である。歳は九つ。小太りで色黒。鼻
がちゅっと上を向いた愛嬌ある顔立ちをしている。

そのたねに、道場の門弟たちは稽古着の洗濯をた
のむ。乾きにくい雨の日が続く中の晴れ間は、たね
には嬉しくも忙しい日なのだ。

小十郎が、

「たねは、働き者ですから、すべし十五は洗って干
してあげる」といふ。梅雨の晴れ間に感謝しなが
ら、

「ういろう、千代が、
「ちやほ、じゆのはれまほ きらいいじゃ。たねが
あそんでくれぬ」

「それは仕方ありません。たねは洗濯仕事で手いっ
ぱいですゆえ」

「このせうのうい あめのひがうつくしゆとは
な。じゃ。なせ、ぶらうりつへへ」

「せせむじやう。小十郎には分かりかねます」

「おひなせう、じやなけとつと じゆが かちうい
けいこののた」

「それには、なごりこやう」

「あのなが わかひぬいじやが おおごな」

「#」と「」ネンデすね」

すると千代がいった。

「このせうのうい ちやほは ーしわかぬぞ」

「なごりこやう」

「このあう、このせうのうい は ちやの あそひあこ
しき、すゆえと「このういじや」

タラヨウ

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古
を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いている
と、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてき
た。千代は五つ。

「このういじや、ういじやかける きのはっぱが ある
ぞうじやが、ういじやあか」

と小十郎に訊ねた。

「知っています。タラヨウの葉です。桜木の旦那寺
である常楽寺の境内にもタラヨウの木があり、落ち
た葉を拾って字や絵をかきました。お千代さまは
その葉の「うい」はお知りになりましたか」

「たねじゃ。おなごいとま、じをかいて まなんだ
と聞いた。このせうのうい、このあたりには、そのきは
なごか」

「はい、ちひひとこやう。常楽寺の和尚さまから、お
寺に植えられたこの「うい」が多いと聞きましたか……

……。お千代さま、なごゆえタラヨウなのですか
「ちやほ、じゆえを、かいてみたいのじゃ」

「なごり、お寺にさがしてみませうか。先ずは金
剛寺へ入参りませう」

「あたしさまの、ふまとのてらじゃな」

「はい。古剝ゆえ、タラヨウが植えられているかも
しれません」

金剛寺にはタラヨウの老木と若木があった。小十
郎は住持の天誉和尚に、葉をいただく断りをいれ、

まずは一枚、若木の枝から楕円形の葉を取って千代に渡した。

千代は本堂の階段にタラヨウの葉を裏返しにおき、小石の角で黄緑色の葉裏に「ちよ」と書いた。じぼらくこい、

「おつ、せんが、くるくなつてへへ」

と千代が驚きの声を上げた。そして、

「じぼらくこい、じぼらくこい」

千代の求めて葉をむしりすぎた小十郎は、天普和尚に叱られたのであった。

風切地蔵

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるべ井戸の横で体を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代がやってきた。千代は五つ。気ままでわがまま。小十郎が又右衛門を師と敬つを幸いに、平気で小十郎に無理難題をいっ

「じぼらくこい、さくや、ふいたかせは、すじかつたな。あめもどしやぶりだったぞ」

と千代がいった。小十郎は、

「そうでしたな。わたくしの家も風ですいぶん揺れました」

と応えた。

「ちよは、よなか」かせのおとで、ななとせめがさめたぞ。「じぼらくこい、なせ、あのおつな、じよいかせが、ふいたのじや」

理由は知りませぬが、昔より、立春から二十日、二百二十日あたりには、あのような大風が吹くので注意するよう伝えられています。ことに今の時期は、稲が花を咲かせる。お百姓には大事なときですの、で、風を鎮める祭りをしつと「さもあるよつです」

「いねが、あめかせで、たおれたら、おひやくこい、うは、たいへん、かなしいな」

「そうです。それで神さまや仏さまにすがったりします。姉上が嫁いだ信州・深山藩の隣りには、一直線となる山の上と街道端と峠とにお地蔵さまを祀り、三体で風を防いでもらっているムラもあるそつ

です」

「おじおつ、おまが、かせを、ふせい、くねるのか。」

「おじ、じぼらくこい、じよい、おじおつ、おまを、ちよのやじき、じよいて、おつ」

「お千代さま、いすのお地蔵さま、その場所、祀られたのにはそれなりの意味やいわくがあるもので、じよいます。やたら動かしてよいものでは、じよいません」

と小十郎がたしなめると、千代は、

「な、じよ、おまが、あたまを、おつ、おじおつ、おまになつて、かせから、じよ、おまを、まね、きを、まね」

と無茶振りをしたのであった。

アメンボ

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、道場を出てはねつるべ井戸へ向かうと、井戸の横で、千代がしゃがみこみ、小たらいをのぞいてい

た。千代は又右衛門の孫娘で五つ。気ままでわがまま。小十郎が、

「お千代さま、何を見ておいでですか」

と声をかける、千代は顔を上げず、

「むじや。みすの、うえを、すべる、むじや。」

「これはなんじや」

といった。小十郎は、たらいをのぞいた。

「ああ、アメンボですわ」

「じよ、おつ、じよ、おつ、おまめのは、なせじよ、や」

「なぜじよ。不思議ですわ」

「ちよは、わかるぞ。すいめん、じよ、ういて、いから、じよ」

「なにゆえ、水面に浮けるのじよ」

「それは、わからぬ。「じよ、おつ、なせだが、か、な、かえて、みよ」

小十郎はあらためてアメンボを見た。長い脚が四つ、体の下から出ている。頭には短い脚が二つある。それらの脚の先端は毛が生え、水面を押して小さな球面を描いている。

小十郎は修行の旅の途中で見た、あることを思い出した。それは紀州の山奥。一軒の民家の横に大きな滝があり、その滝壺で、両足の下に二尺ほどの木の輪をつけて、男が水の上で立っていたのだ。

地震

旅から帰り、師の安土玄之丞に話すと、

「おそろくその家は忍者の屋敷で、足下のものは『水蜘蛛』であらう」と教えてくれた。

「お千代さま。しらんなきさい、アメンボの脚の先を。すべの脚の先に小さな丸い凹みがあります。脚先が水をはじいて水面を押さえているから、しずまなうと見まじた」

「じいちゃん、あっぱれじゃ。じいちゃん、アメンボのうなじがなせアメンのじゃ。きょうはじいちゃん、よごたきじゃね」

千代のなせなせ攻めで、応えに詰まった小十郎であった。

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終

え、つるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が飛び出てきた。千代は五つ。気ままでわがまま。

「じいちゃん、みちゃん、じいちゃん」

と千代は西隣りの空き地にそびえる杉の方向を指差した。小十郎が見ると、杉の上の青空に、赤・黄・青・瑠璃・紫の色帯が杉の木の半分くらいの長さで浮かんでいった。

(虹だ。んっ、まじや)

と小十郎は思い直した。

「お千代さま、空の虹は、雨上がりなんだよ。おまのと聞かされております。しかし、今日は一粒も雨が降っておりませぬ。いかなるかわくの虹でありまじやんか」

「じいちゃん、わかるといっては、きんかこ

ごなぬ」

「はい、奇っ怪じいちゃんです。良からぬじいちゃんがおまなほよこのじいちゃん」

「よからぬじいちゃん」

「はい、例えば、大火事や地震でござる。」

「なるはこわいぞ。いえがカタカタゆれたぞ」

「巷には、ナマスが騒ぐと地震がおこるとか、空にまっすくな雲が出たらおこるとかの噂がいろいろあります。しかし、あのような虹の噂は聞きませぬゆえ、大丈夫かと思えます」

「だがもし、なるがあつたら、どうする」

「家が潰れるやもしれませぬので、外に逃げるのがよろしいかと存じます。竹やぶに逃げ込むとよいとも申します。竹は根が横に張っているので、地が丈夫なのだそうです」

「やじき」 たけやぶはないわ」

「お屋敷の南は人家のない畑地です。母上さま畑にお逃げになるのよろしいかと」

「じいちゃん、まじや」

「地震はこじ起るかわかりませぬ。道場に小十郎

がおらぬかぎり、無理はしなごまゆ」

「おらば、じいちゃん、おじいちゃん、おらぬとき

おじいちゃん、なるに、まじいじいちゃん」

またまた無理をいふ千代であった。

アリジコク

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終

え、つるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が泣きながら近づいてきた。千代は五つ。気ままでわがまま。小十郎は泣き顔の千代を見るのは初めてだった。そこで、「お千代さま、いかがなされました」と訊いた。

「しるまぢが、うるさい、あつちへいけって、ちやをおこした」

鶴吉とは、堀江町の魚屋のむすじで、歳は七つ。

「このあたりの子とまたちの親分を気取っていることは小十郎も知っている。

「鶴吉がなにこい、お千代さまを怒ったのでこい、じい

嬉しき行い」

千代が、まじまじと小十郎の顔を見た。

「おては、じじゅうろう。むかし、つるきちとおなじことをしたな」

見透がされ、小十郎は頭をかいた。

日がさ

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、つるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が飛び出てきた。千代は五つ。気ままにわがまま。小十郎が又右衛門を師と敬つを幸いに、平気で小十郎に無理難題をいう。「じじゅうろう、おつたてついまを、みち」と千代がいった。

小十郎は天を仰いだ。そこには、丸い虹色の輪を広げた陽があった。

「日がさつじじゅうろうな。あはは、これから天気がわるくなるあかしたそつです」

「ちよが、やめよ」といったから
「なにを止めよとおっしゃったのですか」
「じじゅうの、ゆかしたのあなにアリをおとしたらすなからでてきたむじじ、すなのなかにひきずりまれてな。アリかわいそつだから、そんなことやめよといったのじゃ」

小十郎は、千代の言葉で「このあらまじを推察できた。鶴吉たちが浅間神社の床下のアリシロクノ巢に、とらえたアリを落して、様子を見ては楽しんでいたのであるつ。千代が仲間だったか、通りかかったかわからぬが、」かわいそつだから止めてほしい」と頼んだようだ。それが年下の女童に意見されたと感じた鶴吉の動にをわったのであろう。

「お千代さまが怒鳴られる話ではありませぬ。むしろ仏の教えに叶う善を行いでいませぬ。アリも縁あってこの世に命を受けしもの。戯れて命を奪うはよろしくありませんぬ。」

さりながら、アリシロクは、暗い土の中で穴に落ちてくる獲物をひたすら待つ身。滅多に得られぬ餌なれば、アリシロクにとりまじしては、このつえなき

「だが、そのまじなつを、もつた」

昔からのいわれでいせぬ。わが国には、お天気「まつわる民のいいたえがあり、観天望気と呼ばれます。観天とは空の様子などを見ること、望気とは、これからの天候を予測することです。」

お千代さまも聞かれたことがあるやもしれませぬが、例えば、『夕焼けの翌日は晴れる』『猫が毛をなめると雨になる』『ツバメが低く飛ぶと雨が近い』『クモが巣を張れば雨は降らない』などは、いずれの観天望気のことかわれつじじいませぬ。「じじゅうろう、ものじじいませぬ」

「ただただ、姉上に教えていただいたものじじいませぬ」

「じじゅうろう、ひがわがでけると、あめじじいのだじじいじじいわかったが、あ、ひがわが、じじいじじいのかげと、じじいじじいませぬ」

「おては、……、姉上に聞くとはおおじませぬ」
「あ、おては、……、きこつませぬ」

「じじい、おては、……、それじじい、信州は遠くじじいませぬ」

「なり、おてをじじいませぬ、きこつませぬ」

あくまでも無理をいいたい千代であった。

ひまわり

十九歳の剣士、桜木小十郎が齋藤又右衛門道場の代稽古を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代がやってきた。千代は五つ。気ままにわがまま。その千代が、

「じじゅうろう、じじいじじいひまわりも、いきおいがいいな。やじきのひまわりは、まよの、せたけの、おてにまつたな」

「ひまわりのはなは、おてをじじいませぬ、みじく、ひをまわすそつじじいませぬ」
と続けた。

「確かめたじじいはおおじませぬが、書の時など、お天道をまじい向うでつるじじいませぬ」

「きんじな はなごやな」

「おつと 日まわりですね」

「そうしてから小十郎は千代に訊いた。」

「日まわりは、花の後、どいつの物ですか」

「きねんは ははづえが たねをとった。そのた

ねを じよし まいたものが いまきておる ひ

まわりじゃ。それ たねを ほつるくで じつて

たべたぞ」

「そうでしたか。今年は母上にお願ひして、実とな

った日まわりの一しを、そのまま庭に残しておいて

まらしのほつてどつて」

「残すてどつてなぬのじや」

「鳥がひまわりの実を食へにきます。鳥によつて食

へ方がちがうので、面白じやな、」

「そうか、おもてなにか」

千代が話のつた。

小十郎は知っている。ひまわりの種に集まる鳥は、
あるものは種を足で押さえ、くちばしでついでついで割
つて食べる。またあるものは種をのみこたでくちばし

しを動かしく、ぶいっと殻だけを吐き出す。それをス
スメがまねをする。

（お千代さまは、どの食へ方を見られるかな）

小十郎は楽しくなった。

夕立

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終
え、井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から
又右衛門の孫娘の千代がやってきた。千代は五つ。
気ままでわがまま。

「あついのけい」とは、かんじんじや」

と千代がいった。小十郎は、

「日を決めた稽古は休めませぬ。暑いからと休めば、
寒いからと休むてどつてもなります」

「みあげたものじや。ちよは あついと かぜのと
おるへちで、ひるねじや」

「お千代さま、このあつきは今しばりくのがまんで
す。空に、夕立を降らす入道雲が広がっています。

雨が降れば、その後ははべつと涼しくなります」

「おお。くものながか ひかしたぞ」

「いなばかりです。じきに雨が来ます。お千代は

ま、お屋敷へお戻りくだなご」

「ごじや。じいぢゆつたちを みたご」

「では、道場の縁側にお上がりください。風向きに

よつては雨がかかるかもしれませんが、じいぢは
すぶ濡れになります」

千代を縁側にあげ、道場の板壁を背に座らせた。

小十郎も縁側にあがり、座った。

空が光り、次いで「コロコロ」と音がした。

ちやあつて、急に激しい雨が降ってきた。

ど、一瞬あたりが明るくなつたと同時に、「ドガ

ン」と耳をつんぬく音とともに、西隣りの空地の杉

のてつへんに音が落ちた。すると、杉は真つ二つに

割れ、白煙をあげ、轟音とともに地に倒れ落ちた。

千代が小十郎にしがみついた。小十郎は落ち着い
た声で千代にいった。

「大丈夫です。雷はすべに去ります」

すると、震えながら千代がいった。

「じいぢゆつじゆつちよは かみなりけいそをとひら
けつなご。すよのへそを ままれ」
「は、いかにつに守りまじやうや」
「じいぢゆつじゆつじゆつを かみなりけいさだじち
よのへそは、みがしてもらえ」
「この機にも無茶振りをする千代であった。

花火

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古
を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いてい
ると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてき
た。千代は五つ。

「じいぢゆつじゆつきんじは じゆつじゆつのかわひ
らきじやぞ。はなびをみにははつえとまいるが
じいぢゆつじゆつ まいらぬか」

「ほお、花火ですか。見たいですね」

「きまじいじや。じいぢゆつじゆつを ちよとけいはつえの
「へへ、じいぢゆつじゆつじゆつじゆつじゆつじゆつじゆつ

大川の川面を埋めつくして、明り提灯で屋根のふちを飾った見物舟が浮かび、兩岸の堤防の上は花火の見物客で立錫の余地もなかった。千代の母・千鶴は、

「この先は人があふれ、千代が迷子になるかもしれませぬ。離れたこの場所で見まじょう」

と堤防の端の草の上に腰を下ろした。

「ははうえ はなびが みえぬのでは ありませんか」

と千代が心配した、千鶴は、

「大丈夫です。母は以前も、この辺りで見ておりませぬ」

そういわれて千代は不満げな顔で腰を下ろした。

小十郎も草に腰を下ろした。

突如、川の上流の空で、だいたい色の無数の火花が弾けて消えた。ややあって、ドーンと破裂音が聞こえた。それで千代が、

「「じゅんじゅん なんだじゃ いまのは」と訊いた。

「なぜかは知りませぬが、花火の光は音より早いというところじょうな」

「そうか。いなびかりも そうであったな。おとがおくれてきこえた」

「隣の杉の木に音が落ちたときは、まったく同時でしたから、距離が遠のくほど、おくれるようですね」

「「い」と」 きついたな。あまり やくにはたちそうにないが」

と聞いて、千代は、「ニヤッと笑った。

まつゆは

十九歳の剣士、桜木小十郎が齋藤又右衛門道場の代稽古を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代がやってきた。千代は五つ。気ままでわがまま。その千代がいった。

「「じゅんじゅん 美しいな。おととつとつがキ

「へえ、よく存知ですな」

「うるきさたちが はなしていったのじゃ」

「鶴吉ですか。なら、ちよつとまつゆはかな」

「なんだじゃ まつゆはとは」

「肩に唾をつけるとキッネにだまされな」という俗説があります。それで、まつゆはとは、あやしげ、疑わしいぞとこの意味です」

すると千代が、

「そうか うるきちは まゆつはか。ちよは キッネにはかされるまえに」 うるきさは」 はかされるまえに うきをつけねばな」

日食

「三吉キッネですか。仲間を集めて花嫁行列をやったり、大名行列をしたって話ですが、ほんとうでしよつかね」

「ちよは しんじるぞ。キッネは このはを あた

「「じゅんじゅん なんだか そとが くびくわなつて

きたぞ。かんじぬか」

今、道場から外に出たばかりの小十郎は、明るき
にさほど違いはないまじりに感じた。空を仰ぐと曇
つない快晴で、陽が輝いている。が、輝く陽にいつ
もとは違つて気配を感じた。

(きょちうは月の朔(一日)。宝曆暦には……)

小十郎は地面におちる羽つちわ楓の影を見た。黒
い影のなかにいくつも小さな光がある。木漏れ陽だ。
が、丸くない。

(ナンジだ。まちがひなご)

小十郎は道場の玄関脇の物置を探した。棚に廿二
検査が一ツ、置かれてあった。

「じつとみんじ ますますくらくらなつてぬ」

千代が心細げな声でいった。

「お千代さま。理由をお見せいたします」

検査を持って物置を出た小十郎は、井戸端で検査
を逆をたして地面におき、しずかに持ち上げた。黒
影に空の目からの光が映りこむ。

「なんじや。みかひきみたいになかたちが いっぱい
あるわ」

「お天道さまの今の姿です。真ん丸が欠けてこのよ
うな形になったがゆえ、暗いのです」

「じつとみんじ」わからぬつちなる」

「あるいは、まっと欠けまじつ、すゝると、さびに
暗くなります」

と、いってから小十郎は、いつも無茶をいう千代を
まっと怖がらせたかと思つた。それだ、

「お天道さまが、なくなつてしまつてもしれません」

「わっ」と千代が泣いた。

小十郎が(やった!)と思つた次の瞬間、

「じつとみんじ おひさまをとりまじつてまいね。

とりまじつまで、じつにもゆるな。このかたをかぶ
つて はよう いけー」

追い出されたのであった。

セミ取り

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終
え、井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から

千代が竹の棒を持ってやってきました。棒の先には竹ひ

しを丸めた輪があり、木綿の袋がぬいつけてある。

「じつとみんじ ちやみんじ ちやみんじ ちやみんじ」

あたりをセミの鳴き声がめざつてくる。

小十郎が鳴き声を耳当てて枝の樹へむかうと、頭
の高さほどのところから、腹を動かして鳴くミンミン
だまがいた。

「お千代さま、じつとみんじミンセミが」

「ちよ」と千代は袋を振りおろした。が、
「ミン」「ミン」残してセミは飛び去った。

「じつとみんじの枝の幹の、先ほどの高さでセミがとまり
た。しほらくして、シーシーと鳴きました。千
代が訊いた。

「じつとみんじ」ちやみんじの鳴き声は、ミンミンと
なつて

「袋を上へ上げ、そつと近づいて、一列に袋
の口をセミにかざせられた」

千代はいわれたとおりに動いた。そして、「とつた
ぞ」と叫んだ。

「お旦那、とつて、小十郎は右手で袋を抱え、セ

ミを確かめると、袋に左手をいれてアノラセミを摘
み出した。アノラセミは羽を激しく打ち振り、シー
シーと鳴きわめいた。
「じつとみんじ。じつとみんじ。なくのをとめね」

「承知」と、小十郎は右手の親指で蟬の腹の先を強
く押し込んだ。途端鳴き声がやんだ。

「ほお」と千代が小十郎の手の先を覗き込んだ。
そして、「ちよまや」といった。

千代は右手の親指で、小十郎が掴んでいる蟬の腹
の先を押しした。が、力が弱く押し込めない。アノラ
セミはより激しく鳴くばかりだ。

「じつとみんじ じつとみんじ じつとみんじ。にがしてや
ね。そして、なかないセミをさがせ」

鳴かないセミはいる。メスである。が、鳴かない
じつとみんじを探するのは難い。

(お千代さまは、雌のセミが鳴かないと知っている。
それか。)

入道雲

十九歳の剣士、桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるべ井戸の横で身体を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代がやってきた。千代は五つ。気ままにわがまま。

「じいちゃん、また、じいちゃんへもかかっていますぞ。きょうも、ゆうたけがな」

「書いすから、ひと鬮はつれいすな」

「じいちゃんへもかかたが、うん、うん、じいちゃんへもかかっています」

「わたくしが知る入道とは、仏道に入る人、つまりお坊さんです。お坊さんですから、頭に毛はなく、つるの坊主頭です。その頭と、もくもくと湧き上がる雲の形が似ているからかかっています。聞いておられます」

「なるほど、じいちゃんへもかか。あのくもには、すくなくとも、十にんのぼうすが、いそいそな

おきこをまわし、「トコトコ」と、おどがするわけじゃない」

「いや、それはちやと運して思います」

「いなびかりは、ぼうすどまが、ななをしたときや……。そつが、あたまをぶつけあって、めからひばなを、だしたときか？」

「そんなことはないと思います。なにより入道雲はお坊さんへいませた」

「ならば、なぜ、いなびかりを、するのじや」

「わたたくしは分かりませぬが、雲の中になにかが起つて、じいちゃんへもかかっています」

「ならば、じいちゃんへもかか、いつ、みづまごた」

「あのよつな高いところへは上れませた」

「たこに、のつても、だめか」

「わたたくしは石川五右衛門ではありませぬ」

「くもを、よんで、のとつのは、じいちゃんへもかか」

「わたたくしは孫悟郎ではいませぬ」

「やくに、たため、やつじやな。まう、じいちゃんへもかか、千代は、お坊さんへもかか、小十郎は、ぼつと

一息ついたのであった。

カフトムシ

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代がきた。そして、

「じいちゃん、また、じいちゃんへもかか。あのくもには、すくなくとも、十にんのぼうすが、いそいそな

と右手に持った虫かごを小十郎にみせた。

「雄のカフトムシですね。どうしたのですか」

「じいちゃん、あかりにとんできた」

「ほう、南の雑木林からではいすか」

「じいちゃん、なにをたへるの？」

「ナラの樹液にいたとこをを見たことがありますか、な、何をたへるかは……」

「たへるものがな」と、しつこくしつこく

「よまりましたな。虫かごをもって雑木林へ行き、樹液をさがしてしまじょうか」

「ええのたび、な、じいちゃんへもかか、いそいそ

や。「じいちゃん、まかせろ」

「それは、勘弁を。できないとおれば、逃がしてやるより生かす方法はなきやうな……」

「じいちゃん、な、かいたいはおまわぬ」

「では、これから林へ逃がしてしまじょう」

小十郎と千代が畑のあぜを歩いて「ナラやく又ギが茂る林にはいると、そこは涼しく、風で木の葉が「すれあひ音」に満ちていた。

「じいちゃん、と小十郎が太い幹を指さした。

幹の一部が黒く湿っていて、千代の知らない、なにやら、虫がむらむらしている。

「クワカタ、カナブン、カミキリです。近づいてはなりません、スズメバチもいます」

「むじかしの、むじかしの、じいちゃんへもかか」

「近づかず、じいちゃんへもかか」

そういって小十郎は虫かごを受け取り、中のカフトムシを掴んで、脚を竹ひしからゆっくゆっくはがして、足もとの枯れ葉の上においた。

「あ、お千代さま、戻りまじょう。スズメバチのな、な、長居は無用です」

千代はスズメバチを恐々見つ、頷き、「あのはざに」さされる。やぐは「じゅうじつにまかせた」といふなり、猛然と屋敷に向かつて走った。

ホタル

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代がきた。千代は五つ。気ままにわがまま。千代がいった。「じゅんぎちたちが はなしていたぞ。そうへえしんでんに」ホタルがとんでいるそうなの。「鶴吉とは、堀江町の魚屋のむすこで、歳は七つ。このあたりの子どもたちの親分を気取っている。そして惣兵衛新田は、浅間神社の右の道の先、愛宕山の南麓に広がる。「ちよは、ホタルをみたい。「じゅうじつ、そうへいしんでんに」これにいけ」

稲田にはたくさんホタルが舞っていた。子どももたくさんいた。千代は目を輝かせて虫取り竿を振り回し、ホタルを追った。が、どうも捕らえられないように、「じゅんぎちたちが、つかまえたか」と遠くから訊いた。「はい」と応えて小十郎は、目の前の稲の葉の上で光るホタルを捕らえ、千鶴が持つ、おそろく逃げてしまつたらう虫がこに入れた。

ホオズキ人形

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づき、「ほら」と赤い実がついた草をみせた。「ホオズキですね」とにであったのですか」「おぶつだんのままの たなにあった」「(盆棚に飾ってあったものをもってきたのだな)と小十郎は察した。そこで、

「お千代さま、ホタルが飛ぶのは、日が落ちて暗くなってからです。新田への道には丸木橋もあり、夜はあぶのうごきいます。この近くでホタルが舞う場所を見てきまじょう」

小十郎には目ぼしがあった。道場から四町ほど西に向かったところに伊勢社がある。その境内にゆたかな湧き水があり、南に流れた先に稲田がある。そこにホタルがでる。鶴吉たちがそこを話題にしなかったのは、鶴吉の喧嘩がたき、長吉の縄張りだからだ。

その宵、小十郎が、稲が一尺ほどにのびた水田で探すと、目の先の稲の葉の上で、小さな光が点滅し、ふわりと宙をとんだ。

翌朝、小十郎は又右衛門宅を訪ねて、ホタルが四町ほど先で舞っていることを伝えた。すると千代の母・千鶴が、「ずいぶんホタルを見てないから私も見たい」といった。

夕暮れて、小十郎が迎えに行くと、千代は木綿袋の虫取り竿を持ち、千鶴は竹ひこの虫かごをもって玄關に出てきた。

「お千代さま、ホオズキはご先祖がお盆に戻られる時に必要なものです。お戻しください」

「いやじゃ。見つけたからは千代のものじゃ」

「お戻しなされたならば」

と小十郎はいい、流しの先のサツキの陰で赤い実を五つほどつけたホオズキを見て、

「そのホオズキで人形をつくりまじょう」

千代はうなずいて走り帰り、小十郎はホオズキの実を二つもぎ、矢竹の葉を一枚とって、中央脈の右で裂き、さらに二つに裂いた。

戻った千代を道場の縁側に腰かけさせ、小十郎は前に立つてホオズキを一つ手渡し、同じ動作をするようにといった

小十郎は実の袋の先端を両手で引き割った。割った袋の二つを半分に裂き、もう一つも半分に裂いた。千代がそれに習った。

「お上手じょう。次ぎは袋を下に折って、まとめます。赤い玉が頭で、下は着物です。帯として、矢竹の葉を結びます」

千代は、ホオズキ人形を手に持ち、なんとかか竹の

帯を巻「しつするがしつまくもかな。」

「しつもんし おひが むすべ。」

「お千代さま、縁側に腹はいにならわて、お試しくだわ。」

腹はいになった千代は、帯の葉を床に置き、その上に入形をのせ、葉で一回纏った。

「しつもんし りまさん。」

「ちいぢいぢいぢい。小十郎のお見せです。」

小十郎は帯を更に一回結び、千代に返すと、千代は「はははははは、みせてくる」と走り去った。

フウッ。小十郎は、ひと息吐いた。

セミとササ虫

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終

え、つるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代がやってきた。千代は五つ。気ままにわがまま。

千代は見越しの老松へ向かいながら、

「しつもんし、アリのきょうわつが、やしきの」

わから、しつもんきたぞ。」

といった。小十郎は千代の足もとを見た。なるほどアリが行列をなしている。行列の先は、と見ると老松の根元にセミが死んでいた。

千代がつぶやいた。

「アリにたかられた、セミはかわいそうだが、しんでしまっているから、まあ、いいか。」

「アリは冬に備えて、盛んに食べ物を集めているの、ですわ。」

と小十郎がいった。

「ほんまには、うるせうくわい、ないていたセミの、いえも、せびくくなつたな。それだけの、セミが、しんだとすれば、アリは、たへものが、てにはいり、およろこびぢやな。」

「アリとは別の虫も、死んだセミを食へますし、鳥は生きたセミを襲います。クモは巣にかかったセミを餌にします。また、日の本には、人もセミを食する地方があるぢやないです。」

「セミを、たへるのか、うまいのか。」

た。千代は五つ。その後から千代と背丈が似た女童がついてきた。

「しつもんし、ちぢのどまたちの、さきぢやんじや。こはまはすぢやうじ、すぢぢや。」

「お初にお目にかかります。又右衛門道場代稽古の、桜木小十郎です。」

と挨拶して小十郎は早紀をみた。瓜実顔に、つばらな腫である。髪は左右に振り分けている。前髪を目の上で切り揃えた千代にくらべて、おっとり穏やかな女童に見えた。

「しつもんしは、むとんれまどす。」

と早紀は伏目がちに挨拶した。小十郎は千代に訊いた。

「お一人で、なぜしつもん。」

「しつもんぢが、しつもんぢの、ぼんぢ、てしつもんぢの、みぢぢ、あかいはながたくなさな、て、きれいぢや、はなしておいたから、みにゆへうしつもんぢや。しつもんし、いしつもんぢかぬか、て、なすにきた。」

「ありがたういぢやいます。墓地のきれいな赤い花で、

「味は、しつもの、てしつもん。」

と小十郎が口にする、千代が目を輝かせた。

「しつもんし、しつもんし、しつもん。」

と、おじえぢ。」

ヒガンバナ

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてき

「それは大仕事を。お手は大丈夫でしたか」
「だいじょうぶとは どういうことじゃ」

「ススキの葉のふちはたいへんちぢついていますので、触れ方によっては手を切る」ことがあるのです」

「しらなかつたが てをきる」とは なかつたぞ」

「ちぢつていました」

「「じゅつじゅつは つきみになせ だんごと ススキを そなえるのかを しておるか」

「はあ、おおよそは。だんごは真ん丸のお月さまをかたじつたもので、だんごに使う米粉は、お米への感謝と豊作の願いからだといひます。そして、月に供えただんごを食べると息災でいられて、幸せになるぞうです。」

また、ススキは、月の神さまを家にお招きする目印として供えられるものによつてです」

「「じゅつじゅつは ものしりじやな」

「姉上に教えられました」

「また あねうえか。ちよの あねうえは いつになつたら つれてくるのじゃ」

「それは、たとえお月さまが西から上つたとしても、

無理な話でございます。ご勘弁を」
と小十郎は断つた。

人さらい

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から千代の母の千鶴が近づいてきていった。

「小十郎、わたくしたちと一緒に祭りについておくれでないか」

「かまいませんが、なにかありましたか」

「あちこちの祭りで子どもがさらわれているという噂があるの。わたくし一人で、千代と早紀ちゃんに付き添つのが不安なの」

浅間神社の正面参道は、両側に半町ほど杉木立が並び、それぞれの木立の横の常夜灯には、すでに短ころの火が点っていた。参道や境内には露店が並び、

大人や子どもで大賑わいだ。鮎屋、キツネやサルのお面売り、金魚売り、弓矢の射的、くじ引き、農具屋などがあり、そば屋の屋台も二つ出していた。

拝殿前の石畳を進んだ小十郎は、

「千鶴さま、あやしい気配があります。お千代さまとお早紀さまの手をお握りください」

と千鶴にいつと、後に二歩にさがつた。

すると、黒覆面の男が六、七人、人波からあらわれて小十郎たちを囲んだ。周りの人々が悲鳴を上げて後へ逃げ、拝殿前は男たちと小十郎たちだけになった。小十郎はすばやく千鶴たちを拝殿階段の前に移し、背にした。

覆面男たちが刀を抜いた。小十郎は手にしてきた木刀を構え、「人さらいか」と訊いた。

「だとしたらとつする。若造」

と正面の黒覆面が上から斬り込んだ刀を小十郎は受けず、左に動いて覆面男の胸を打ち、身を前に沈めて左の覆面男の左足を打った。

男の一人が早紀の腕をつかんだ瞬間、小十郎は木刀でその男の肩を打ち、右から横に斬りかかった男

こつこのトサカ

の刀を木刀で叩き落とすと、男の眉間を打突した。すると、残る覆面男たちは、地に倒れた仲間を見捨てて逃げた。

周りの賞賛に気をよくした千代が叫んだ。「さすが ちよの よつじんぼつじや」

桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代がやってきた。千代は五つ。気ままでわがまま。

「「じゅつじゅつ ほら みてみて」

と千代が呼びかけた。見ると千代は大ぶりの桃色の花を一つ、左の前髪に結んでいた。

「ムクゲですね。よくお似合いです」

「ははつえに つけていただいたのじゃ」

「そうでしたか。ムクゲにはこんな遊びも」

といつて小十郎は、横木戸脇のムクゲの花から花び

らを一ツ抜き取り、花びらの底に両親指の爪を当ててゆっくりと三分の一ほど裂いた。それから裂いた部分を指で軽く揉み、

「お千代さまのトサカです。」

そういつて小十郎は、裂いた花びらで、千代の小さな鼻をはさんだ。

「じゅんじゅん じぶんの かおがみたい。」

「お屋敷の池に映しては、いかがでしょう。」

小十郎は、池の端にしゃがんだ千代の帯をしっかりとつかんだ。千代は頭を前に出して、池の水面に映る自分の顔を確かめた。

「おっ、じゅんじゅん トサカじゃ。おっ、こいがよってきたぞ。えさだと おもったか。」

近づいた五、六匹の鯉は、口をパクパクあけて、餌をねだった。

千代が鼻の上のムクゲの花を、ホイッと池に投げた。それを一匹が口で受けた。

「こいが、トサカをたべたぞ。じゅんじゅん もつとトサカをもつてまいれ。」

「餌ではなきゆえ、食べぬと思います。」

「かまわぬ もつてまいれ。」

小十郎が取ってきたムクゲの花を、千代は一つまた一つと花びらを摘み取って池に投げ入れた。鯉たちは、あらそって口にしたが、やがて餌ではないと気づいたようだ。いずれもが去り、花びらが水面に漂った。

「やはり鯉たちに見破られましたな。」

と小十郎がいつと、千代は、

「もったいない。じゅんじゅんが たべよ。」

アマガエル

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、つるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、

横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。

千代は五ツ。気ままでわがまま。その千代が、

「じゅんじゅん ケツケケ ケロケロと なきこえがするぞ。なんじゃ。」

と訊いてきた。

「アマガエルです。雨が降るかも知れません。」

「アマガエルがなくと あめが ふるのか。」

「以前、お千代さまにお話した観天望気ではないです。たくさんの人々が体験した事実が、市井のいわれとなったものです。」

「なにゆえアマガエルは あめがふると わかるのじゃ。」

「なぜでありませう。遠くの雨を肌で感じる」とができるのかもしれない。

「おっと、このアジサイの葉の上に一匹います。そつと近づいて見て下さい。」

「おっ、くちのしたが おおきくふくらんだぞ。くちが すこしあいて ケツケツケツと おとをだしたぞ。おもしろいな。」

「小さな体なのに、大きな声ですね。雨が降ることを喜んでいいのかもしれません。」

「なぜ、よるじぶのじゃ。」

「アマガエルは水の中に卵を産みますから、池の水がふるる雨降りがうれしいのではないでしょうが。お屋敷の池には、アマガエルの黒く小さな卵がある

かも知れません。」

千代と小十郎は又右衛門屋敷の池でアマガエルの卵をさがしたが、みつからなかった。

「この時期はまだ産卵の最中のはずですが……。あるいは池の鯉が卵をすべて食べてしまったのかもかもしれません。」

と小十郎がいつと、

「なに、こいが、じゅんじゅん トサカをたべなかつたやつらが カエルのたまごは たべたのか。ゆるさぬ。」

と千代が怒り、口をパクパクあけている鯉たちをにらんだ。

タンボウ

十九歳の剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場の代稽古を終え、井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。

千代は五ツ。気ままでわがまま。その千代が、

「うしろのうしろのほうにははづえが つくつくれ
たぞ。きれいにやるの」

と頭を指差した。黄色い花輪が乗っている。

「みごとなタンポポの花輪ですね。小十郎も昔、姉
上たちとよく作りました」

「そうか。「うしろのうしろ」つくれるのか」

「はい。それでは、お千代さまにタンポポの腕輪を
つくってあげましょ」

小十郎は、道場の門から街道に出て、西隣の空き
地でタンポポを二十あまり摘んだ。

井戸端で小十郎は、左手にタンポポを一本もつと、
その花と直角に二本目のタンポポの花をそえ、茎を
一本目の茎にぐるぐるまわし、二本目の花の前を通
して後に引いた。三本目以降も同様にしてタンポポ
の花紐を長くのはすと、千代の手首が緩くぐる丸
まで、先と後をタンポポの茎で結んだ。

「お千代さま、お手をお出しなす」

小十郎が千代の左手に花輪をはめてやると、千代
はうれしそうに腕を見た。そして、

「うしろのうしろ、タンポポが あまっていますぞ」と

やってくる。千代は五つ。氣味まじわがまま。千代
は、

「うしろのうしろ、ははづえが げんかんに なにか

らかわったものを かぞえたぞ」

と、今見てきたものを告げた。

「それはいかうなものでしたか」

と小十郎が問うた。

「ちよびがなのあたまで、ちよびがひびがついた
きのえだじや」

と千代がいった。そして小十郎は、

「お千代さま、暦の上では今日まで立冬です。明日
から春になります。つまり今日は、季節を分ける節
分の日。それで飾ったのです」

「せしびんだと、なぜあんなものかかひの
じや」

「鬼を退散させて、鬼のいない新しい季節を迎える
ためです。焼き魚の魚はイワシでありましょ。鬼
はイワシの匂いが嫌いだそうです。ちよびがひの葉は
はははイラギの葉のはず。鬼は、ヒイラギの葉のト
ゲトゲで目を突かれることを恐れて近づかないのだ

木桶の中のタンポポを見ていった。

「摘みすぎましたな。お千代さま、一つお取りくだ
さい。それをこのようにちぎって……」

と小十郎は自分がつまんだタンポポの茎を、下から
二寸ほどの先でちぎった。

千代が同じようにした。小十郎がいった。

「茎を口にくわえて、軽くかんで吹きます」

小十郎はくわえたタンポポの茎を、「フーウ
フーウ」と囁らした。

千代も同じように音を出した。そして、「うしろの
いびきみたいじゃ」と笑った。

小十郎は「このまま何事もなく刻が過ぎることを、
心の中でしんげんに願った。

節分

十九歳の剣士、桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での
代稽古を終え、はねつるべ井戸の横で身体の汗を
拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が

近づいて

「お千代さま、ちよびがなにか、いままじやのじや」

「うしろのうしろ、おにを みたじやがあるか」

「いえ、見たじやありません」

「みたものは、いるか」

「昔のつわき話では、桃太郎は鬼ヶ島で鬼退治をし
たそうです。源頼光は羅城門の鬼の片腕を斬り落
したといます」

「なむ、うしろのうしろ、そつだんじや。もせたら
うしろのうしろ、おにの いばしよをきき、おに
をつれてまいれ。ははづえが げんかんにかぞつ
たものは、ちよびが かならず、とりはずしておくか
ら」

「お千代さま、鬼を家に入れるなど、だめです。母
上が聞いたら、母上が鬼になります」

そう、小十郎は千代を諫めた。

(小十郎と千代) (一) (おわり)